



ラディスラウス・ポストゥムス (1440-1457)

ハプスブルク家異聞 (その一)

先帝の忘れ形見と後見人

——ラディスラウス・ポストゥムスと神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世——

幅 健 志

伯父ティロル公の没後、ハプスブルク家一門の総領として采配をふるわんとする神聖ローマ皇帝フリードリヒ三世にとって、実に扱いにくい少年がいた。皇帝との年齢差は二十三、この老獪な後見人とくらべれば、いわば赤子同然ともいえる存在ではある。だがこの公子は高貴な血脈ゆえに、一門の総領で、父エルンスト鉄公の遺領、シュタイエルマルク、ケルンテン、そしてクラインを受けてついていたフリードリヒをも、ゆくゆくは遥かに凌ぐ声望と地位を約束されていた。ドイツ国王アルブレヒト二世の忘れ形見ラディスラウス・ポストゥムスである。

先帝の遺児ゆえに国が乱れるという事情は古今東西を問わないようだ。権力の座に近づこうとする者達にとつて、なかならず摂政役を必要とする幼君は垂涎的。彼の野望は幼君の奉戴、先君の遺志という大義のもとに正当化され、政敵もこの錦の御旗を前にしてはうかつに手が出せない。公子ラディスラウスも生れ落ちるや、すさまじい争奪戦をひきおこす。父親のアルブレヒト五世・オーストリア公は、ハプスブルク家から長らく遠ざかっていたドイツ王冠をアルブレヒト二世としていた。人物であり、またルクセンブルク家最後の当主ジギスムントの皇婿として、ハンガリー、ボヘミア両王号をも獲得していた。ラディスラウスは送り名が示す如く、父親の死後誕生した子供ではあるが、直系男子という当時にあつては何ものにも勝る血統を有している。つまりこの公子は、父王の全遺領を継承すべき権利を身におびていたのである。

ただオーストリアとちがい、ボヘミア、ハンガリー両

国では歴史的な慣行として、有力貴族たちによる国王選挙、もしくは推戴という形式を踏まなければならなかった。したがって王族同士で結ばれた契約による継承権の主張もそうすんなりと受けいれられたわけではない。ここにはむしろ民族主義が土着勢力の利害と結びついている。アルブレヒト五世が義父にして神聖ローマ皇帝のジギスムントから、後継者に指名されたときも、両国の貴族達は、はじめこれを拒む。かれは承認をとりつけるため、ポーランド王や先帝の妃をかつぎだしてきた勢力に武力であたらねばならなかった。

対トルコ作戦の帰路、英主アルブレヒトは、グラン近くの幕営で赤痢とおぼしき病に倒れてしまう。当時まだトルコ勢はドナウを渡るまでには至っていなかったが、プスタの情勢は次第に逼迫の度を増していたのである。この国王の在位期間は余りにもみじかく、ボヘミアとハンガリー支配の実効はあがらなかったものの、両国がハプスブルク家のひとりや、国王にいただいたという事実

はこれ以後のオーストリアの発展にとって重大な布石となる。

夫アルブレヒトが不慮の死をとげたとき、妃エリーザベトは身ごもっていた。男児懐胎を祈願したかいあったのか、彼女は夫の死後三か月目、一四四〇年冬に、ドナウ河畔コマロムの町で皇子を出産。王亡きあと再び情勢は混沌とし、先王を奉じたハンガリーの諸勢力は、生後三か月のラディスラウスを国王に推戴。聖イシュトバーンの王冠が幼児の頭上に輝く。聖王の冠でいちはやく敵対勢力に既成事実をつきつけようとしたのである。それも王冠を盗みだしてという非常手段。

ここにヘレーネ・コッターネルというエリーザベトつきの女官が登場する。この女官は女だてらに王冠盗み出しを實行し、若君を胸にいだいて戴冠の場に臨んだばかりか、当時の女性としてはめずらしく、その後日譚を書き残したのである。「わらわが腕の中、このヘレーネ・コッターネルが腕の中で」「やんごとなき御子ラスラ様

は」とほほえましい女傑ぶりを發揮、しかも彼女は親王様の戴冠が古式に則り、正当な手続きをふんだものとの確認も忘れない。マジヤール族ほど王冠に執着し、その輝きを尊んだ民族はないといわれる。カール大帝冠の古拙をみせる七宝製の聖者像と大粒の原石で飾られ、頭頂にかたむいた十字宝珠をいただく聖王イシュトバーンの冠、これによる加冠こそハンガリー王たる身分の証しであり、王者たる尊嚴の源泉であった。もつとも、歪んだ十字架は、ヘレーネが王冠をクッションのなかに押しこんで持ちだしたからだとも伝えられているが。ラディスラウス登極の正統性をからめながら、女官の筆先はただどしく、だが、誇らかな調子で戴冠の典礼にも触れるのだ。それによるとまず戴冠はイシュトバーンの冠で、式の挙行はグラン、つまりエステルゴム大司教の手でなされなければいけない。更に戴冠の地は聖王ゆかりの町、グラン南方約七〇キロメートルのシュトゥールヴァイゼンブルク。これが古来からハンガリー王戴冠にかかわる

不文律であった。

我が子の行末を思う女主人の意をうけた女官ヘレーネによって、ヴィシエグラード城に保管されていた王冠は、凍結したドナウを渡り、ひそかにコマロムに運びこまれる。ほどなくして王妃とラディスラウスは、ドイツ国王派の貴族にともなわれ、歓呼をあげながらシュトゥールヴァイセンブルクにはいった。忽然と消え失せた王冠がアルブレヒト王妃の手もとにあることに、さだめし警固の任に当たっていた伯は仰天し、一味の卑劣な行為を非難したものと思われるが、女官の記述はすこぶる闊達、そこには尋常ならざる手段で入手したものだというやましさはこれしきもない。ハンガリー王権の体現とみなされる王冠にあつては、それがここに「ある」といった厳然たる事実だけが問題なのであろう。

歴代のハンガリー王の頭上に輝いた聖王の冠に相違ないことを確認した者たちは、改めて皇子をありがたくおしいただいた。ラディスラウスはまず、ウルリヒ・フォ

ン・チリ伯の手で騎士に叙任される。王妃は毅然としたなかにも母親らしい気づかいを見せ、剣を握りしめる伯の傍らで、「後生ゆえそつとあててくりゃれ」とささやく。その金色に光り輝く剣には「汝たじろぐこと勿れ」との銘が刻まれていた。それからグラン大司教による塗油式。ラディスラウスは王衣をつけ、小さな頭に王冠をのせられて玉座にすわった。まだ満足に首もすわらない三か月の幼児ではあったが、「ほんに一歳児のようにあらせられる」という参列者たちの称賛に、侍女ヘレーネも得意満面の体である。

上・下オーストリアという遺産への思惑を秘めながら、フリードリヒ公の弟アルブレヒト六世も式に馳せ参じた。あわよくば後見職をとという料簡である。戴冠式から一か月も経ずして、はやくも対立勢力はポーランド王を推挙し、ボヘミヤもバイエルン公に王冠を奉呈しようという動きをみせる。フリードリヒともども前国王から後見人に指定されていたエリーザベトは、まもなく弟公

アルブレヒトにも後見職を与え、幼子をのこして他界。ここにハプスブルク家の兄と弟の確執がまたくりかえされる。恐らく無領公である王弟への警戒からだと思われるが、土着勢力の干渉もあって、孤児は正式にフリードリヒの手もとに帰し、国王の居城ヴィーナー・ノイシュタットで養育されることになった。

ポーランド王は後見人フリードリヒを尻目に勢力を拡大し、ハンガリーの大半を掌握。トルコ軍はこの地の東部を荒しまわり、混乱の中でマジャール族出身の将ヤノシュ・フニャデイが頭角をあらわしはじめた。ポーランド王が対トルコ戦で落命したあとの空白期、この民族派の武将が名目的には国王ラディスラウスのハンガリー総督として、この地の実権を握ってゆく。

フリードリヒが伯父の後見を脱した時期、ハプスブルク家は伝統の遺産分割の結果、エンス附近で東西に二分された上・下オーストリアを家領とするアルベルティン

系と、シュタイエルマルク、ケルンテンを領有するレオポルト系、さらに後者の傍系ティロル公領といった三系統に分裂していた。レオポルト系をつぐフリードリヒの領国では、土豪勢力が強かったうえに、ひとつ違いの弟公は家督の分割を要求し、武力行使も辞さない姿勢。故アルブレヒト王の遺領、上・下オーストリアの采配は、家領の統合をねらうハプスブルク一門の総領にとってにはなよりの関心事である。いわば主なきこの領土をめぐる、諸勢力はラディスラウスを口実に、後見職のフリードリヒに敵対してくるのだ。こうした状況はオーストリアだけのことではない。ボヘミア、ハンガリー、メーレン、ポーランドなど近隣諸国のねらいも同じだったから、もともと領国支配すら思うにまかせないフリードリヒは、次々と譲歩をしいられる。しかし彼は豪奢な帝衣に無残な瘦身を包みこみ、飽くまでもねばりぬく。あらゆる勢力はフリードリヒという一点をめぐる乱舞しながら、いつとはなしに自滅し、消え失せていくのだ。まる

で生成消滅のこわりをぬけていているのは、フリードリヒただ一人であるかのように。

フリードリヒ三世の治世を知るのに、かっこうの資料がある。のちにピウス二世として三重冠をかぶったイタリアはアンコナ生れの人文主義者アエneas・シルヴィスが著わした史書である。彼は本名をシルヴィオ・ピッコロミニといい、フィレンツェで人文学を修めたあと、枢機卿の秘書となった。バーゼル公会議などの外交舞台で手腕をみせただけでなく、詩歌、旅行記、小説など俗人文芸にも長じた才人である。皇帝フリードリヒは彼を宮廷秘書として厚遇し、オーストリアのルネッサンス文芸がこの文人とともに開花したとみなされている。『フリードリヒ三世伝』は多少主に対する身びいきのきらいもあるが、それでも比較的冷静な筆致で当時の状況を伝えていると評価できようか。

資料には皇胤をわが手元にと画策する先帝の遺臣二名のくわしい記述がみられる。ひとりにはスラヴォニア、シ

ュタイエルマルク、ケルンテン、クライン、上・下オーストリアの各地に勢力をはるウルリヒ・フォン・チリで、ラディスラウスの騎士叙任式を執行した伯。叔母は皇帝ジギスムントの妃という名門だが、皇帝は死の間際、妻の貪婪な権力欲を嫌い、娘婿のアルブレヒトに全家領を遺言したいきさつがある。もうひとりは一代前にバイエルンから流れこんできた素姓も定かでないウルリヒ・アイツィンガーなる人物。アルブレヒト王の信任厚く、上・下オーストリアの経営をまかされ、今ではこの地方随一の実力者にのしあがっている。弟公アルブレヒトが独断ですすめていたアイツィンガーへの城の売りわたしが、兄王の干渉でゆきづまったあたりから、彼は公然とフリードリヒに反旗をひるがえす。宿願のローマゆきが具体化していた時期、ドイツ国王はとりあえず懐柔を試み、留守中オーストリア総督の大役をつとめてくれるよう申し入れるのだが、この野心家は「総代各位の同意なくば、お受け致しかねる」とすげなく拒否。彼は上・下

オーストリアの地方勢力を代弁していたのである。シュタイエルマルク公として故アルブレヒト王の遺領内で嫌悪されていたフリードリヒは、ラディスラウスをもちだして巧みに世論を操作するアイツィンガーに為すすべもない。いやむしろ、事態の推移を見守ろうとの、いつもの時間かせぎの作戦にでたのであろう。それに帰還の暁には、名実ともに神聖ローマ皇帝のはずであった。かくして反対派の手に渡る危険があった公子をつれ、そそくさとフリードリヒはイタリアへ出発してゆく。

西暦一四五二年三月一日、ドイツ国王の一行は前夜宿営をはったローマ市郊外の草原から、きらびやかな武器に身をかざり、整然と隊列をくみながら市中に入ってしまった。逃げるようにしてヴィーナー・ノイシュタットの居城と市門とをあとにしたフリードリヒは、漸くケルンテンで旅装をととのえ、クリスマスを期し寒風と積雪の道をとったのである。イタリアの地にふみ込んだとき、はやくもヴェネチアは使節団をもって王を出迎え、領内



皇帝フリードリヒ三世 (1415-1473)

通過の先導役と諸経費とをひきうける。フェラーラ、ローニャ、フィレンツェなどの主要都市も膝を屈し、礼をつくして歓待。幸か不幸かコースをはずれているミラノ、マントヴァは祝賀使節団を派遣し、王一行に随行させる。フリードリヒは密かに安堵の息をついた。

そもそもドイツ国王のローマ詣りとは教皇庁やイタリア諸侯・諸都市の利害確執にからんで要請された遠征に近いもので、「永遠の都」での加冠という栄誉もさるこ

とながら、その実、半島に対する覇権確立の野望をもになう、きらびやかな偽装の祭典であったのだ。時はうつり、カール、オットー、フリードリヒ大帝の偉業ははるかかなたの地平線に、かすかな残光としてとどまっているにすぎない。現実感覚の欠如したいくたのドイツ国王は、大帝時代の栄光を夢みて半島の地に踏み入ったものの、行手をはばまれ、帰路を遮断され、ほうほうのていで逃げかえる。イタリアはもはや「帝国の庭」ではなかった。皇帝の威光など地におちている。とはいえ、都市を核とした小国が互いにせめぎ合う状況にあっては、虚構の権威とはいえそれなりに利用価値もある。なによりも皇帝の御入来は、現体制安堵のお墨付が舞いこんでくれたことにもなる。状況がかわれば、反古同然の代物に違いないのだが、それでもあるにこしたことはない。ただ半島の内政に口だしされるのは御免こうむりたい、これがフリードリヒを迎えたイタリアの本音であったろう。

折しも最大のライバル、フランス国王は百年戦争の終熄期にあり、とてもイタリアまでは手がまわらず、ナポリのアンジュ一家はアラゴン王家に襲われ、半島の親仏勢力はじっと鳴りをひそめている。フィレンツェ、ミラノ、ヴェネチア、ナポリはうまく均衡状態を保ち、繁栄を謳歌。おそらく、フリードリヒの秘書から聖職の道にはいり、すでにシエナの司教に衣がえしていたアエneas・シルヴィスが、教皇庁とイタリア諸侯に磐石の備えをしたのだらうと思われる。諸都市は盛大な祝宴をはり、この賓客に慶賀の品々を献じ、逗留費用を捻出。市門の鍵もうやうやしく差しだされはするもの、すぐまた元手におさまってゆく。すべては文字通り通過儀礼にすぎない。

フリードリヒのローマ入城は、およそ七千もの人馬がくりだす華やかさだったともいう。露払いの騎馬武者二百、つづいて金色の地に黒鷲の紋章を縫いとりした帝国旗、そのあとにラディスラウスと王弟アルブレヒトが率



エレオノーレ・フォン・ポルトガル

いる千二百騎。フリードリヒは市の元老職と執政官に先導され、刀持ちの騎士を従えながら、二人の枢機卿にはさまれるように駒をすすめていった。黒い帽子に頭帯状の金の飾り、金糸の縫いとりもあざやかな褐色の衣装。うちまたがるは豪華な馬衣とくつわとあぶみで飾りたてられた栗毛である。国王の後には廷臣や顧問団、外国使節の面々がつらなり、さらに旌旗をかかげた小姓騎馬集団。

ポルトガル騎士団に警固され、黒髪の端麗な横顔をみせながらゆく馬上の乙女はポルトガル王女エレオノーレである。青地のマントに豪華な装身具。護衛船団にまもられながら、長い船旅のはてようやくイタリアの海岸についた王女は、シエナの町でフリードリヒと出会う。まだ幼さの残る小柄な花嫁と、すでに三十代の後半にさしかかっていた鷲鼻で堂々とした体軀の花婿であった。ふたりは戴冠式に先立ち、法王の前で華燭の典をあげる。妃は所領を夫にもたらしはしなかったが、何ものにもかえがたい鳳雛マクシミリアンを残すことになる。

行列にはさらに帝国諸都市からの五百の騎馬隊が加わり、後衛をかたちづくるのは、教皇とローマ市さしまわりの傭兵隊三千二百名である。総勢七千の人馬のひびきは市中にこだまし、旗幟と羽飾りは五色の雲のたなびきを思わせて街角をうずめつくした。法王庁の手前、聖天使城の城門で、国王一行は教皇側の出迎えをうける。十字架や香炉をささげもった司教、司祭、参事会員らが居

並び、厳かに聖歌がわきあがる。ローマ市民も貴賤の別なくより集まり、歓声をあげながらばらまかれる錢に群がった。

教皇ニコラウス五世はサンピエトロ寺院の階段で、大勢の枢機卿と従者らにとりまかれ、フリードリヒの到着を待ちうけていた。国王は馬をおりる。幾人かの枢機卿が彼を教皇の前まで導く。国王はまず教皇尻下の足に接吻、臣下の礼をとり、献上の品々を奉呈。猊下はおもむろに手をさしだし、それに口づけしたフリードリヒを三度軽くだきしめてから、国王の頬に祝福の接吻をした。それから教皇はひざまづくフリードリヒの頭上で祈りをささげたのだった。

教皇庁訪問とポルトガル王女との婚儀のあと、改めてフリードリヒの神聖ローマ皇帝戴冠式が、カトリック総本山・サンピエトロ寺院でおこなわれた。参列した高位聖職者四〇〇名。長々としたいくつもの儀式を経て、俗界最高の顕位体現の瞬間が近づく。

「それから皇帝は広い壁龕におさめられた聖ペトロの祭壇へと進み、そこで教皇さまは平和の接吻で、皇帝をかれの下僕、かつ助祭として迎えられた。そしてミサが始まり、讚美歌『グローリア』のあと教皇さまははじめて礼拝式の祈禱をささげられた。それから幾多の者たちに神の大きいなる栄誉、かくべつの恩寵とあがめられてきた皇帝カールの聖衣を、幾百年にわたる歴代の皇帝と同じように身につけて傍らの椅子にすわる皇帝のために祈られた。そして教皇さまは福音書朗読の後、皇帝と御妃を聖ペトロの祭壇に導かれ、ひざまずく皇帝の頭上でずいぶん長いこと祈られた。それから教皇さまは皇帝カールの聖なる王冠を皇帝の頭におかれ、すべてラテン語で語りかけられた。それから皇帝カールの聖剣を抜き身のまま皇帝におさずけになった。かくして皇帝は聖ペトロの騎士となられたのである。皇帝は聖剣を腰に帯びた後、これを抜きはなち、うち振り、ふたたび鞘におさめた。それから教皇さまは有難い祈禱をとなえられながら、皇帝の右手に聖なる帝笏を、左手に聖なる十字宝珠をお与えになり、さらに多くの品々をもお渡しになった。このあと終りに臨んで皇帝は教皇さまの両足に接吻され、椅子についた。それから皇帝の前に弟アルブレヒト公、諸侯、貴族、騎士とその従者、帝國都市使節団がひざまずいて、祝福の言葉をのべた。」

これはフリードリヒに随行してローマに赴いたさるオーストリア貴族の記録である。接続詞「それから」を連

発しながら、戴冠の式次第は克明に報告され、最終場面は、教皇ニコラウス五世による国王の塗油式となっている。文書には教会関係のラテン語が散見されるもの、おそらく下オーストリアでは教養の上として通っていたこの人物も、教皇貌下が加冠に際して唱えたラテン語までは理解できなかったようだ。祝福と王者たる者の心得を説いたラテン語の章句は、多少の異同はあったにせよ、本質的な部分は一八世紀までかわることがなかったという。

「汝帝冠をうけよ、我は卑しき司教が身なれど、この手によりて、汝が頭に帝冠を授けん。汝心せよ、これこそは、聖者の尊厳と勇者の御業とをあらわすものなり。まこと、これによりて汝は我らとともに聖職にあずかり、我らが如く内なるものに従いて、魂の牧者となり、支配者とならん。かつまた汝、外なるものにおいても、忠実なる神の下僕となり、艱難辛苦のなかにありしも、キリスト教会と神によりて委ねられたる帝国の勇敢なる守護者たれ。使徒にかわり、すべての聖人の許しのもとに我らが遂行せんとする祝福の職命によりて、汝は委託されし政を良くつかさどり、統治の実をあげるべく常に心がけよ。そは誓れたかき武士のひとりとして、徳

行なる宝玉にて飾られ、永遠の至福なる報奨にて加冠されんが為なり。汝がその御名と御位とを代行すべき我が主なる救世主とともに、常にそこにおわしめ知らしめ給ふ神とともに、精霊といつなる父とともに、汝がとこしえに、とこしえに、慈しみあわんことを。」

下オーストリアから随員のひとりとして行列に加わった者の筆は無論、皇帝一行の見事なイタリア入りの報告に終始する。実のところ、ローマ詣では大変な物いりであった。威風堂々のローマ入城とも見えたが、フリードリヒの懐中はさびしい限り、ゆく先々で御祝儀ならぬ冥加金をとりたて、皇帝特許を発し、献上品をあてにしての旅である。しかしこのこと自体は当時の習慣でもあって、フリードリヒだけをとやかく非難すべきではない。ただフリードリヒの示した吝嗇と貪婪は、王者たるものの強引さとは無縁の、実にちまちなちまちなものだったという。ヴェネチアが引き出物として高価なガラス製品を進上したとき、黄金をほしがっていた皇帝は、手をすべらせたを見せて、これをくだいたと伝えられる。相手側は

内心大いにあきれながらも、それは海千山千の商人、なにくわぬ顔で改めて金製品を献上。惜しみなく臣下に領土なり金品なりを賜下することは、王者の大いなる美德のひとつとみなされ、またこの行為こそが主従の関係を強化する最も有効な手段である。財源の乏しさからだとはいえ、口の端にのぼせられるほどの貧乏性は、フリードリヒの領国支配のうえで大きなマイナスとなったであろう。もっともアエneas・シルヴィスは、オーストリア貴族の強欲を指摘し、皇帝は後見人とし幼てい王のため、所領管理の役目を誠実にはたしたのだと弁明にこれとめてはいる。

また公式記録にはもちろん触れられていないが、ローマ市民はただばらまかれる御祝儀に群がったばかりではなかった。賤民の群が皇帝のまわりに押しよせ、あたりに異様な空気が漂う。皇帝と騎馬隊は、この無気味な集団をけちらそうと実力行使、多数の死傷者がでる混乱になったとも伝えられる。

イタリアが用意してくれた豪華けんらんたる舞台もつかの間、領国にもどった皇帝を迎えるのは叫喚と騒乱の光景である。出発まえにラディスラウスの引き渡しを要求し、さらに留守中大いに力をのばした反皇帝派マイルベルク同盟による内乱であった。当初アイツィンガールの下に結集した上・下オーストリアの諸勢力は、いまやかのチリ伯を首領にあおぎ、ボヘミヤ、メーレン、ハンガリーとも結びついている。聖シュテファン寺院の塔上には同盟旗がひるがえる有様。四千の手勢をひきつれて入国したフリードリヒではあったが、例の如く攻勢にでるわけでもなく、兵力を各地に分散。八月下旬ついに同盟軍はヴィーナー・ノイシュタットを攻撃、この時シュタイルマルク出身の傭兵隊長、アンドレアス・バウムキルヒナーが獅子奮迅の働きをみせ、からくも落城はまぬがれたものの、休戦交渉の席上、皇帝は譲歩をよぎなくされた。

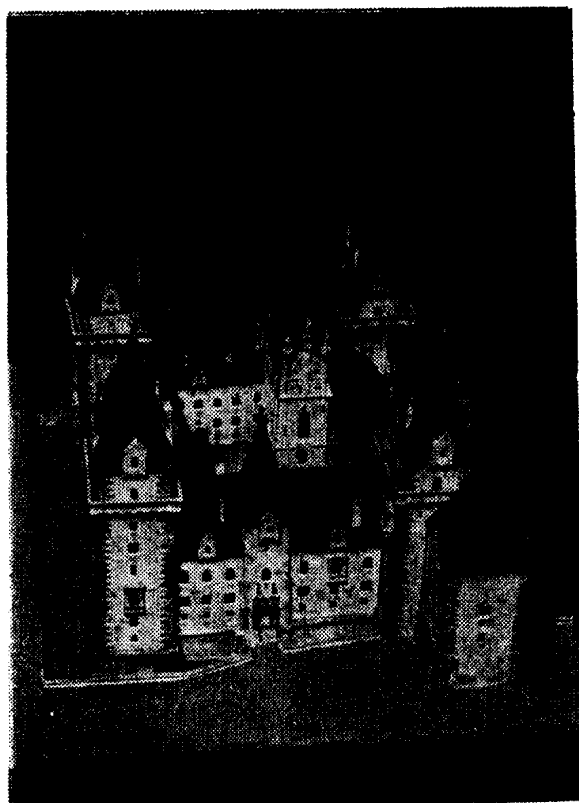
日ざしはまだきつかったが、さわやかな風が秋の訪れ

をつげる九月の初旬、ヴィーナー・ノイシュタットの町はずれ、ウィーンに向う街道で公子の引き渡しがおこなわれた。チリ伯やアイツィンガーなど同盟派の面々が、「まるで獄舎から解きはなれた囚人」を出迎えたかのように、今や御年十二に達した皇子を感涙にむせびながらとりかこむ。フリードリヒ憎しの声が渦まくなかで、「シュタイエルマルクの染み」を洗いおとす為、ラディスラウスは沐浴をさせられる始末。一同は皇子をいただいて、ひとまずチリ伯の居城へと引き揚げていった。数日後、少年王は反帝気運の盛り上がっていたウィーンの町にはいる。

「王はここで凱戦將軍のように迎えられた。市民は大いなる喜びのあまり泣いた。僧侶と全市民が王と顧問団一行を出迎え、童子たちは王を讃えて合唱した。着飾った女たちが大挙して市門までくり出し、王の両手に接吻をあびせ、アルブレヒト王の後胤が再び与えられたことを神に感謝した。姉宮は弟君の首を抱きしめられ、よもや相まみえることもあるまじと思し召されていた弟君をかき抱き、喜び給うた。至るところ祭の喜びでみちあふれていた。」

ウィーンの人口はこのころ三万ないし四万を数え、ニルンベルクやフランクフルトを凌いでいたと推定される。まだハプスブルク家王城の地という重責を担うまでには至っていないものの、その勢威はすこぶる盛んだった。オーストリア辺境伯、バーベンベルク家の勢力圏が東に広がるにつれ、政治拠点もドナウの流れにそって川下へと徐々に移動し、ウィーンに王宮を構えたのは、八代目当主ハインリヒ・ヤゾミールゴットである。彼の治世下、オーストリアは「小特許状」により辺境伯領から公領に昇格。王宮はウィーン旧市内、現在のアム・ホーフにあった。この十二世紀中葉を境に、ウィーンは着々と実力を貯えはじめ中世騎士文化の黄金期を現出。したがって上ライン地方から乗りこんできたハプスブルク家の始祖ルドルフは二七〇年にわたって築きあげたバーベンベルク家の遺産をのこらず継承したことになる。

中世都市の例にもれず、ウィーンはさまざまの特権を享受しながら、自治権と商工業を基盤に発展してゆく。



故宮復元図

すでに十四世紀の後半、建設公と称されるルドルフ四世の時代に、町は新たな相貌をおびはじめていた。聖シュテファン寺院のロマネスクの身廊は、正面の「邪教の塔」をそのままに残しながら、改築・拡張されてゴシックの様式をまとわされる。これと同時に起工された南塔、「シュテフル」もゆっくりと空にのびはじめ、七〇有余年にわたり石工の鈍音が絶えることはない。それも一四三三年には完成し、町をはるかの高みから睥睨してい

た。プラハに遅れてはならじと開校されたウィーン大学は、盛時七千名もの学生をヨーロッパ各地から受け入れ、大方は女と酒とけんかを学生特権と考える集団ではあったが、それでも国際都市ウィーンを世界に売りこむのに一役かってくれたとはいえようか。

町をとりかこむ城壁には七つの市門があった。城壁の随所には物見櫓が配され、さらにこの外側には堀割が走っている。ハプスブルク家の居城はバーベンベルクのそれではなく、新しい空間を求めて造営されていた。現在ウィーン宮殿の一郭にとりこまれているシュバイツァーホーフである。王城内で最古のものとされるこの複合建造物はかつての輪郭を今に伝えている。王宮はほぼ方形に近く、中央に中庭、四隅にはそれぞれ望楼を配置、この四つの塔が建物全体をがちりと固めている。右側の外壁は市壁のうえに積みあげられ、一段と峻険な外観を誇示し、近づく敵を威圧していた。しかし残りの市中に面した部分には、巾四メートルほどの深い堀割がめぐら

されているだけで、これといった防衛設備はない。強いというなら、堅固な石の胸壁が、堀割の内側から直接垂直に切りあがり、城門にはね橋で強化されていたこと位であろう。したがって市街戦になると、市門を突破した敵兵や暴徒化した市民の群れによって、王宮はたちまち包囲されるといふ事態が生じてしまう。ハプスブルク家の者たちは幾たびか、すぐ窓際まで押しよせる敵勢の喊声に身をさらさねばならなかった。

市中の建物も、とくに豪商などの住居は立派なたたずまいを見せていたようで、石造り、きらびやかな破風にガラス窓といったものもあり、地下に広がる酒場、酒倉などの大きさは、「大地の下にもうひとつのウィーンがあるようだ」と、アエネアス・シルヴィスを驚嘆させる。このルネッサンスの文人は十四世紀のウィーンの商業活動、とりわけこの頃の主要産業で、輸出品の花形でもあったワイン生産の有様を筆にとどめてくれた。

「信じ難いほどの生活物資が毎日町に運びこまれる。卵や

ザリガニをつんだ荷車が延々とつづく。ものすごい量の小麦粉、パン、肉類、魚、鳥などが搬入される。しかも日暮れどきにはすべて売りきれ。ブドウ摘みの期間は四〇日、この間、ブドウを満載した三〇〇台もの車が日に二、三回町と畑とを往復する。収穫されるブドウを運ぶために用意される馬は日に千二百頭、市民ひとりひとりには聖マルティニ祭までの期間に、自分の畑でとれたブドウを市中に運びこむ権利が与えられている。どれほどのブドウ酒が製造されるか見当もつかない。これらはウィーンで消費されたり、苦勞してドナウ河をさかのぼり、他国に送られてゆく。市中で小売されるブドウ酒には一〇ペニヒの税がかかり、これは皇帝のものである。毎年一万二千グルデンが国庫におさめられ、それ以外に市民が負担する税金はわずかである。」

繁栄をきわめ、豊かな富を誇る都市は当然のことながら、諸侯の関心をひく。ウィーンも中世特有の内部対立をかかえこみ、都市貴族、ギルド、新興商人階級といったグループが、市政の指導権をめぐる、互に外部勢力をたのみながら血なまぐさい闘争をくりかえす。ウィーンは第一次トルコ襲来をのりきり、オーストリア・ハプスブルク家の本拠地となるまで、まったくの風見鶏であ

った。強大な相手が現われると抵抗の姿勢はみせるものじきに市門を開いてしまう。恭順の健気さもどこへやら、状況がかわれば門前払いをくらわせ、武器をとる。

ルドルフ・フォン・ハプスブルクにも、ボヘミヤ王オタカル二世にも、またフリードリヒ皇帝にも、さらにハンガリー王マーチャーシュに対してもそうであった。こうした姿勢には内部抗争がからんでもいたが、決して弱腰からくる無節操といったものではない。むしろ己れの魅力を熟知したうえでの柔軟さともいえようか。事実、町の不実をなじり、これを破壊しようなどと考えたキリスト教君主は皆無であった。

ウィーンの町を興奮のるつぼと化したラディスラウスには、早逝した有徳の王アルブレヒトの御落胤という民衆の心にうったえる強力な切り札がある。それに反し称号だけは第一級といえ、庶民好みの武勇、豪胆からはほど遠く、策謀の士とみなされていたフリードリヒの人氣はさっぱり。こうした事情を承知していた皇帝は、公子

をウィーンの町に入れないとの条件で同盟派に渡したとも伝えられている。しかし民心がフリードリヒから離れてゆくのも道理、国内は物情騒然、約束の給金すら受けとれない傭兵たちは匪賊と化して略奪をほしのままにする。街道荒しだけではおさまらず、市門にまで迫りくる。街道の群に、町は傭兵をやといひ、その出費に悲鳴をあげる。貨幣の質がおとされ、治安の悪さと相まって商業活動は停滞してゆく。ウィーン市民はハンガリーの王号をもつ若い君主に期待したのだ。ボヘミヤも遠からず王の手に帰すであろう、そうなればウィーンの町が、広大な領国の中心地となるのもあながち夢とはいいきれなかった。

ウィーン王宮にはいったとき、ラディスラウスは十三歳、さっそく側近たちは協議の上、二〇歳まで十二人も補佐役をつけることにする。そうあっさりひとりと立ち立てては困るといふわけ。ところがまたお決まりの内紛である。ボヘミヤが期限をきって戴冠のために王のプ

ラハ入りを要請してきたとき、チリ伯は好機到来とばかり準備にかかるのだが、何はともあれ先立つものは資金である。アイツィンガーは配下の者達に、議会開催のう えでなければ要求に応じるなど指令。ここにドナウ左岸の町コルノイブルクでの談合となる。少年を伴なつてあらわれたチリ伯は、かたわらにびったりとくつつき、片時も離れようとしない。刺客の手を警戒したともいえようが、それ以上にアイツィンガー・グループとの接触を恐れたのである。集会の席上、伯の危惧は的中した。一公領に関する件である旨、「願わくば生国がオーストリアにあらざる方々に御退出を」とのアイツィンガーの強硬発言に王は同意してしまふ。一四五三年十月、プラハでラディスラウスは聖ヴァーツラフの王冠をいただく。ここに父王の遺領であるオーストリア公領、聖ヴァーツラフ王国、聖イシュトバーン王国が、再びひとりのハブスブルクびとの手に委ねられたのである。

若き王をめぐる内紛はその後もくすぶりつづけた。一

度は敗退したチリ伯がまたもや王に接近し、今度はアイツィンガーがしりぞけられる。チリ伯は、ベオグラードをトルコから奪取したもののペストで倒れた老將軍ヤノシュ・フニャデイの後をうけてハンガリー総司令官となつた。彼が権力の絶頂にのぼりつめようとしていたやさき、老將軍の息子たちのしくんだ伯殺害事件が発生。伯なきあとラディスラウスはアイツィンガーと組んでいたボヘミヤ総督イジー・ス・ポディエブラトの手に帰してゆく。総督はフランスとの同盟を強化するため、ラディスラウスとシャルル七世の娘の婚約を成立させた。シャルル七世は百年戦争のさなか、かのジャンヌ・ダルクによつて戴冠された国王である。ところが一四五七年十一月二十三日、ラディスラウスは十八歳の若さで急逝。病死とされたが、錯綜した情勢下のこと毒殺の噂もとびかう。容疑者の筆頭はむろん総督そのひとである。

十五世紀は中葉の作とみられるラディスラウス・ポストゥムスの肖像画がある。羊皮紙にはくつきりとして優

美な目鼻だちの、気品ある青年像が見られる。細かく波うちながら肩までも届く豊かな金髪。ひとときわめだつバラの花環は、フランス王女との婚約を象徴するのだという。えり元は立ちカラーでひきしめられ、一段と表情に高雅な趣きを加えている。おっとりとした貴公子風の風貌、美青年ではあるが男性的な気迫にはとぼしい。権力闘争のなかで翻弄され、人質同然の身であったにもかかわらず、掌中の珠として養育された事情を物語るものであろうか。ともかくこの青年の死によって、アルベルテイン系は絶え、上・下オーストリアは正式にシュタイエルマルク系・フリードリヒの支配に帰してゆく。またボヘミヤは総督ポディエブラト、ハンガリーはフニャディの次子、マーチャーシュの勢力下に置かれ、聖ヴァーツラフ、イシュトバーン両王国はまたハプスブルク家から離れることになった。

かのアエネアス・シルヴィスは皇帝フリードリヒをめ

ぐって展開したためまぐるしい興亡劇を、「事物の不可思議なる変転」と形容した。ラディスラウス、チリ伯、弟公アルブレヒト六世の非業の死、プスタの地におけるフニャディ父子、さらにボヘミヤ王イジーなど皇帝の敵対勢力は相前後して舞台からきえてゆく。

特にカラスを家紋とし勢威をきわめたマーチャーシュ・コルヴィーンが、五〇歳になるやならずで他界したこの意味はすこぶる大きい。ボヘミヤ征覇の意気にもえる王は、フリードリヒと激しく対立し、大軍をもってシュタイエルマルクに侵入、フリードリヒの家領は次々とハンガリー軍に蹂躪され、下オーストリアの各都市も陥落。皇帝はヴィーナー・ノイシュタットを捨て、ウィーンに乗りこまれ、ついにはリンツの町までおちのびてゆく。しかし最終的な勝利は息子マクシミリアンをとうして、やはりフリードリヒの側にもたらされた。古典の造詣も深かったマーチャーシュ王は、マクシミリアンとカール豪胆公の娘マリーとの婚儀を伝えきいたとき、武力

ではなく、いわば閨房の取引きで事にあたろうとする皇帝を揶揄し、「他の者供はいくさをすればいい、汝、幸福なるオーストリアはまぐわうがよい」と、古い箴言をもじってあざけたという。しかしハンガリー王の自負にも壮年をすぎるところから、あせりの色が混じりはじめた。王は密かにハプスブルク家の賢明な政策を羨望し、その胸中には一抹の不安がよぎるようになってゆく。そしてこの不安は突如恐しい現実となった。かれが乗りこんだウィーンの王宮で卒中にみまわれたとき、侍女に孕ませた子供はあったものの嫡出子はない。もしものときには庶出の子を跡つぎと決めてはいたが、母親の素性を思えば家臣の忠誠もあてにはできず、おそらく死に臨んだハンガリー王の胸中には、無念の思いのみが残ったことであろう。事実コルヴィーン王家は彼一代で消えてゆく。

ことごとくは在位五十三年という歳月によるのであるうか。それにしても星辰の動きはフリードリヒの遠大な

構想にそうかのようにめぐり、配置されていくのだ。衆人には「のろま」、「ぐず」と侮られ、流謫にも似た身をかこちながらも皇帝はひたすら待ちつづける。晩年のフリードリヒはリンツの居城で占星術や錬金術にふける毎日を送ったという。堅固な城砦のうえにひろがる地球には、ハプスブルク一門の輝かしい未来をつげる徴候があらわれていたのだろうか。皇帝に不撓のねばりを与えつづけたのは、何よりも強烈な家門意識であり、一族が神聖ローマ皇帝の系譜につらなるといふ高邁な理念であった。「Alles Erdreich ist Oesterreich untertan」(すべからくこの大地、オーストリア家が下にあり)と解されるAEIOUなる五文字に一門の誉れと家訓とを読みこんだのは、フリードリヒがまだシュタイエルマルク公の時分である。そのころから彼は異常なほどの執念をこめて、建造物や所持品に、この五つの母音を刻印してゆく。現実とは余りにかけはなれた内容に、世人は「Alles Erst ist Oesterreich Verloren」(ことごとくの財、オ

ーストリア家から失われぬ」と冷笑。家門の意識は二年近くも躊躇したあげく受けとったドイツ国王の称号によって一段と強くなり、ハプスブルクびととして初めてローマの地で教皇による戴冠を実現したとき、確かな信仰にも似た形姿をとりはじめる。国内が混迷の度を増すにつれ、彼は理念的世界に逃避し、みはてぬ夢の糸を黙々とつむぎ出していったのだ。

妃エレオノーレがはじめての異国でわびしい正月を迎えていたとき、フリードリヒは皇帝権を行使し、その昔建設公ルドルフが、持ちだした「大特許状」をにぎにぎしく承認した。これは金印勅書で選帝侯から除外されたハプスブルク家の威信をとりもどそうとするルドルフ四世によって偽造されたものだといわれる。選帝諸侯の風下にたつことをいさぎよしとしない血気さかな建設公は、一族のために「大^{ネーデルツヘルツォーク}公」の称号を、妃の父君、ときの皇帝カール四世に要求。ところが残念なことに、ルドルフの偽造文書作成に動員された家臣の学識が、本場イ

タリアの古典学の水準には、ほど遠いものだったのであろう。領国の由緒書きに権威を附加せんものと、「小特許状」の帝国印璽を拝借し、そのうえ古代ローマのカエサル、ネロ振りだしの認定書まで添えるという勇み足。当時第一級の学者でカール四世とも親交のあったペトラルカににせ物と決めつけられ、皇帝から却下されたいわくつきの文書である。フリードリヒの父エルンスト鉄公がこの「大公」なる称号をもちいたこともあったから、宮廷の文書室ではこりをかぶっていたわけではないにしろ、多事多難のなかでたかだか「大」がつくかつかぬかの問題をいじくりまわしていたのだ。これは誇り高い妃エレオノーレの気晴らしになったかもしれないが、ただちに効能が発揮されることもない。

又、教皇庁との確執をさけようとするフリードリヒの姿勢は効を奏し、二回目のローマ詣では、ウィーンに司教座を招来した。かの建設公の念願だった司教座都市への昇格である。ただその八年後の一四八四年、ウィーン

大学の新規登録者はたった三名という記録がのこる。機と拡大、家門の誉れと栄光とを求めたフリードリヒの布を見るに敏な中世の学生集団ではあるにしろ、この事態は恐るべきものであろう。数字は何よりもフリードリヒと興隆をかかげた貴重な家訓として代々受けついでいっ晩年のオーストリアの惨状を反映しているのだ。このように一見現実とは遊離した次元で、家領の統合たのである。

〔主要参考文献〕

- Czeike, Felix : Geschichte der Stadt Wien, Molden Verlag Wien, München, Zürich, New York, 1981
 Bermann, Moritz : Alt und Neu, Hartleben Verlag, Wien, Pest, Leipzig, 1883
 Frass, Otto : Quellenbuch zur Österreichischen Geschichte, Birken Verlag, Wien, 1956
 Hantsch, Hugo : Die Geschichte Österreichs, Verlag Styria, Graz, Wien, Köln, 1969
 Kleindel, Walter : Österreich, Daten zur Geschichte und Kultur, Verlag Ueberreiter, Wien, Heidelberg, 1978
 : Österreich—ein Herzogtum, Bundes Verlag, Wien, 1981
 Perfahl, Jost : Wienchronik, Verlag Das Bergland-Buch, Salzburg, Stuttgart, 1961
 Trost, Ernst : Die Donau, Wilhelm Goldmann Verlag, Wien, München, Zürich, 1968
 : Das blieb vom Doppeladler, Wilhelm Goldmann Verlag, 1981
 Tabarelli, Hans von : Altwiener Scherenschnitte, Paulneff Verlag, Wien, 1947
 Wandruszka, Adam : Das Haus Habsburg, Herder Verlag, Köln, 1968
 Wiesflecker, Hermann : Kaiser Maximilian I, Verlag für Geschichte und Politik, Wien, 1971
 Weyr, Siegfried : Wien, Magie der Inneren Stadt, Paul Zsolnay Verlag, Wien, Hamburg 1968
 Zohner, Alfred : Kunst des Tages, Luckmann Verlag, Wien 1964